

## 現場の声に学ぶジャーナリズム実践

金井啓子

### (1) はじめに

筆者が近畿大学文芸学部英語多文化コミュニケーション学科で担当する講義の中に、「Introduction to Journalism」「Practice in Journalism」と題する講義がある。両者とも「Journalism」が入っている。だが、前者ではジャーナリズムを含むマスメディア全般の導入部分を学び、後者ではジャーナリズムの実践を学ぶという形をとっている。

「Introduction to Journalism」では、ジャーナリズムのみならずマスメディアの各分野（広告、広報、映画配給、テレビ局、新聞社、通信社）で働いた経験を持つ人たちを教室に招き、仕事の内容や独特な経験を語っていただき、各ゲストの話を聴くたびに学生たちに要旨や感想をまとめさせた。

「Introduction to Journalism」は、主に大学3年生が学年の前期に受講するものであるが、それに対して本稿で紹介する「Practice in Journalism」は後期に開講されており、これもまた3年生が中心となって受講している。

「Practice in Journalism」では、ジャーナリストが発信している情報に触れる機会を提供する一方で、ジャーナリズムの各分野で働く現役の人たちを教室に招き、仕事の内容や経験を語っていただいた。さらに、各ゲストのお話を聴いた際に感想を提出させたり、学生自身が「ジャーナリスト」となって講義内容の「記事」を執筆させることも行った。

本稿では、この講義の内容や学生たちの反応を紹介した上で、この講義が今後目指すべき姿を考え、ジャーナリズムについて教える際のヒントを多少なりとも導き出すことを目的としたい。

## (2) 授業の概要と学生たちの反応

「Practice in Journalism」では、以下のように講義を展開した。

- 1) 新聞記事の中から「HAPPY NEWS」を選び、エッセーを書く
- 2) 新聞を10種類読み、印象に残ったPositive / Negativeな点を書く
- 3) 「大学生がもっと読む新聞に変えたい！私たちの提案」をテーマに、グループプレゼンテーションを行う
- 4) 朝日放送を見学する
- 5) 映画「ザ・コーヴ」を鑑賞し、フリーランスジャーナリスト・吉富有治さんの講義「取材方法のあり方について」を聴く
- 6) フリーランスジャーナリスト・西谷文和さんの講義「最新映像で見るアフガン&イラク戦争」を聴く
- 7) 担当教員（筆者）をインタビューして記事を書く
- 8) 毎日新聞記者・遠藤孝康さんの記事を読み、講義「アフリカで見たもの」を聴き、記事を書く
- 9) フジテレビのドキュメンタリー「私たちの時代」を鑑賞する

以上の講義の内容および学生たちの反応について、ここで詳しく紹介していく。

### 2-1 新聞記事の中から「HAPPY NEWS」を選び、エッセーを書く

新聞の購読者数の減少が止まらないことが話題になっている。その要因のひとつとして、若者の新聞離れが挙げられている。筆者の周りの学生たちも例外ではない。就職活動が近づいてようやく、それまでほとんど手に取らなかった新聞をやむを得ず読むようになる学生も少なくない。

その傾向に関する分析はまた別の機会に譲るとして、ジャーナリストが発する情報に触れるひとつの方法として、新聞を読むことは効果的だろうと考えた。ただし、なんの目的もなく慣れない新聞を読むのは、学生にとって難しい作業だろう。

そう考えていたところに、日本新聞協会の「HAPPY NEWS」キャンペーンの存在を知った。同協会では「新聞を読んで、心があたたかくなったり、勇気がふっと

わいてきたりするような Happy な記事の切り抜きと、その理由を書いたコメントを送ってください」として、毎年 400 字以内のエッセイを募集している。応募作品の中から、「HAPPY NEWS 大賞」受賞者 1 名には 30 万円相当の副賞、「HAPPY NEWS 一般」受賞者 10 名程度には 10 万円相当の副賞が出る。

そこで、次の講義までの 1 週間に課題を出した。「新聞を手に取り、自分がハッピーな気持ちになる記事を 1 本探して、次回の講義に持ってくる」という課題である。学生たちが選んできた記事の見出しを数点だけ拾ってみても、「10 年連続 200 本安打『ICHIRO は誇り!』」「3 中学生お手柄 おぼれた小 2 男児を救助」「うり坊がママ 福知山動物園に『背乗り子ザル!』」など実にさまざまである。

選んできた各々の記事について、受講者全員が 400 字以内のエッセイを書き、日本新聞協会に送付した。

その中のある男子学生は、朝日新聞に掲載された「ギャルママ頑張ろうよ 育児の悩みにメール相談」と題する記事を選んだ。「児童虐待のニュースが増える中で、私を含める子育てに不安を感じている人達に希望を与えた」などと書いた彼のエッセイが、後に「HAPPY NEWS 一般」を受賞することになった。

## 2-2 新聞を 10 種類読み、印象に残った Positive / Negative な点を書く

「HAPPY NEWS」によって自分の気持ちに沿う新聞記事を見つけた後は、今度はさまざまな新聞を手に取り、それを比較するという作業をさせた。

講義が始まる前に、朝日、毎日、読売、産経、東京、日経、大阪日日、日刊スポーツ、スポーツニッポン、東京中日スポーツ、日刊ゲンダイの数日分を用意した。朝刊と夕刊を発行しているものは、それも混ぜてある。

学生たちは、10 種類の新聞に 5 分ずつ目を通しては、印象的だと感じた部分を「ポジティブ」な点と「ネガティブ」な点に分けて書き留める作業を行った。ただし、各紙で報じられているニュースの内容について評価するのではなく、新聞そのものの見た目や体裁、載せてある記事や広告の選び方などに重きを置くことにした。

その結果、ポジティブな印象を持ったコメントとしては、「文字が他紙より大きく、文字同士の幅も少し広い」「カラーが多い」「文字が少なく写真が多い」「小さ

めで持ちやすい」「テレビ欄が見やすい」「大きなニュースからローカルなニュースまで、さまざまな分野の記事が均等にある」「1面に他紙でやっていない記事がある」「身近なニュースが1面にある」「表、図、アンケートが多い」「天気予報が詳しい」「1面右側の目次が見やすい」「広告が全面カラーでインパクトがある」「他紙にない映画コーナーがおもしろい」「人間関係図があり、文章では分かりにくいものも理解しやすい」「大阪の生活関連の記事が多く、特徴的」「ページ数が少なく薄いため読みやすい」「エンタメ系の情報もある」「時間がない人でも読めるよう、まとめたコーナーがある」「他紙に比べてポップな感じがして親しみやすい」「難しい言葉を分かりやすく解説していた」「脳を働かせるためのクイズを載せるのはおもしろい」「漫画があつてひと休みできた」「あるニュースを取り上げ簡潔にまとめたコーナーは要点がすぐ分かる」「他紙にあまりない学生スポーツの記事がある」などが挙げられた。

一方、ネガティブな印象を持ったコメントとして出たのは、「字が小さく読みづらい」「文字が多い」「文字だらけで写真がないページは読む気にならない」「いかかわしくて怪しい広告が多い」「うわさ話のような記事や個人的な意見の記事がある」「夕刊は薄い」「見出しが小さい」「解説が少ない」「過激な論調が多い」「不景気だという話題が書かれている中で新商品の発売が堂々と書かれていて不思議な気持ち」「同じ話題の記事がいくつかあつて、どれが一番重要か分からない」「広告が多い、大きい」「写真が少ないか、あつても小さいために迫力不足」「記事の枠が平等になっていてメインの記事がなく、印象がいまひとつ」「悪いニュースばかりタイトルが大きい」「全国区のニュースが少ない」「テレビ欄の情報が多い」「1面で、大きなタイトルがある記事の近くに、違うニュースの写真が載っている」「スポーツ以外のニュースがない」「俳句が多すぎる」「ひとつの話に偏っている」「カラーの部分をもっと欲しい」「野球と競馬ばかり」「一面が白黒」「他紙で大きく取り上げているものをあまり大きく扱っていない」「政治・経済を扱う割合が少なくて物足りない」「一面やはじめの方の内容と比べて、真ん中部分の内容が薄く、差が大きい」「一面のどれを注目記事として推したいのか分かりにくい」「派手な色使いで目がチカチカする」「地元の話が多く内容が偏っている」「華がない」「もっとさまざまな分野に手を出してほしい」「内閣支持率だけを書くのではなく、内閣がやり遂

げたことも書くべき」「首相を小馬鹿にしているような表現はよくない。公平に記事を書くべき」「株価等の数字はもう少し大きく見やすく」「ニュースはその事実だけ伝えるべきなのに、書く人の意見で国民の考えが左右されてしまう」「新発見の生物の写真はカラーで」「下半分の広告が詰め込まれ過ぎて見づらい」「記事の文と文の間に広告があって読みづらい」「小さい記事の見出しをもう少し太く」「一面広告が多すぎる」「天気予報はもっとスペースを」「政治問題の記事にはあらずじを」「新聞を読んでいるうちに、ページが外れてぐちゃぐちゃになるから改善を」などの内容だった。

中には相反するようなコメントもあるが、それだけ新聞が幅広い要望を持つ読者を相手にした媒体だということの証左でもあるだろう。今回こうしたコメントを挙げているのは、普段はあまり新聞になじみのない20歳前後の若者たちである。彼らは新聞らしさを分かっていない、いわば素人たちだから、意見を聴いても仕方ないと考える向きもあるだろう。しかし、その一方で、よく知らないからこそ、客観的に評価できる面もあるのではないだろうか。また、彼らは携帯端末などではニュースを読んでいる。だから、紙のニュースについてはあまり知らなくても、ニュースそのものに関して無知ではないのだ。

学生の中からは、「どの新聞も一緒だと思っていたが、この講義を受けてみて、写真が多い、カラーが多いなど、新聞にもたくさんの種類があることを知った。これから新聞は見ていかねばならないと思っていたので、一番見やすい新聞を見つきたい」との感想が聴かれた。

### 2-3 「大学生がもっと読む新聞に変えたい！私たちの提案」をテーマに、グループプレゼンテーションを行う

前述したように、いま特に若者の新聞離れが叫ばれている。そこで、受講者たちを数人ずつのグループに分けて、「大学生がもっと読む新聞に変えたい！私たちの提案」というテーマでグループプレゼンテーションを行わせることにした。共通の題材として、2010年10月11日付の毎日新聞朝刊を用意し、準備期間として1ヵ月ほどを与えた。

プレゼンテーション当日は、毎日新聞社の大阪本社で編集局社会部副部長を務め

る伊地知克介さんがオブザーバーとして参加し、学生の提言にコメントをしてくださいました。

このプレゼンテーションでは、以下のような提案が挙げられた。「新聞はサイズが大きく読みづらい。A3かA4程度に縮めると読みやすい」「政治・経済は難しいために飛ばしがち。カラーを増やしたり、漫画のキャラクターを織り交ぜてはどうか」「購読料が高いのもっと安く」「文章が多く、どこを読んだらいいかわからない。もっと減らせないか」「新聞のページがバラバラになりやすい。ページを接着するか、読みやすくなるグッズを新聞社が率先して売ればいい」「語学コーナーを充実させてはどうか。英語だけでなく、最近是中国語も人気なので、曜日ごとに違う言語を教えるコーナーがあると読む人が増える」「洋服のセール情報があると女性が新聞を手取る」「広告に店のクーポンを載せる。ホットペッパーなどだと翌月まで待つが、新聞ならば毎日クーポンを集めることができる」「大学生は芸能情報に興味がある。芸能人のコラムを載せる場合、決まった人が執筆すれば決まったファンが読む。一方で『笑っていいとも』の『テレフォンショッキング』の形式にすれば、毎日買わないと次に誰が書くかわからないし、誰と誰が仲がいいのか知りたいという気持ちを起こさせる」「新聞の文章は硬くて難しい用語が多い。今は離れたコーナーで用語を説明しているが、もっと数を増やし、文章の中でカッコに入れてはどうか」「遠い話題が多すぎる。もっと地域の情報が欲しい」「ミクシィやツイッターなどで『ニュースに対するつぶやきが新聞に載るかも知れません』と流すと、新聞を手取る若者が増える」「ニュースの見出しだけが載ったフリーペーパーを作って通学路に置く。バーコード検索をすると中身を少し読めるが、もっと詳しく読みたい場合は新聞を買ってもらうという形にする」「写真を増やす」「新聞には自分が興味のない部分まで載っていて、その部分までお金を払っている。分野別に購入できるようにする」「もう少しカラーや写真を増やす」「広告があると記事を読んでいて気が散るので、広告の場所を一カ所に集中させる」「読みたい記事が見つからないことがあるため、ジャンル紹介の文字を大きくする」「キーワードには違う色を使う」「新聞は各行が短い。書籍のように一行を長く」「大学生の大半はミクシィでニュースを読んでいる。そこにある記事はおもしろいものも多く（好きな漫画ランキング、合コンではいけないこと、『ワンピース』のキャラクター

で自分になりたいもの…等々) そのついでに経済も読む。こういうおもしろい記事が欲しい」「どの記事を優先したいのか分かりづらい。文字をカラーにする、太字とカッコを活用する、ひとつの記事に複数の写真をつける、『重要ニュース』と書く…といった方法が考えられる」

さて、こういった提案に対して、毎日新聞の伊地知さんからは、すでに対応していること、参考にしたいこと、可能ならば対応したいが現実的には難しいこと、といった主に3つに分けてコメントをいただいた。さらに数日後に、毎日新聞が首都圏で発行している『毎日RT』を送ってくださった。こちらは新聞のサイズが小さく、記事の内容や見せ方が従来の新聞よりも軽めになっている。これを手にとった学生たちからは「これならいい。読みたい」といった声が上がった。

このプレゼンテーションについて、「グループ内で考えつかなかったアイデアが他のグループから提案されると、『確かに。そんなアイデアもあったのか』と、さらに新聞に対する考えを深くすることができた」という感想が出た。また、「新聞をがんばって作っている人に、自分みたいな素人が提案できることなどあるのだろうかと思っていたが、実際にはたくさんの意見が出て新たな発見が多くあった。とは言え、素人の提案なので批判されるのかと思えば、そういったわけでもなく、記者の人に自分たちの提案をここまで聴いてもらえるとは思わなかったので驚いたとともに印象に残った」と述べた学生もいた。

#### 2-4 朝日放送を見学する

この企画は、大阪の朝日放送のディレクターである木戸崇之さんの厚意で実現した。今は文化財の取材を担当する木戸さんが、2010年10月後半時点には朝の情報番組「おはよう朝日です」を担当していた。そこで、筆者と学生たちが木戸さんの案内で「おはよう朝日 土曜日です」そして「朝だ！生です旅サラダ」のスタジオや、ラジオ番組のスタジオなど、朝日放送の建物内のさまざまな施設を見学させていただいたのである。

土曜日のため正面玄関は開いておらず、通用口へまわった。数十メートルをのんびり歩く学生を見た木戸さん、「ここからは僕たちの戦場です。ゆっくり歩くのはダメ。誰かが歩いてきたらすぐ道をあけるように気をつけて」とびしり。学生たち

の背が伸びた。

まず「おはよう朝日 土曜日です」の現場へ。サブコントロールルームで働くスタッフの様子を見た後、コマーシャルの間にスタジオに入り、出演者のすぐそばに立った。ある女子学生は「声を殺して非常に緊張していた」そうだ。別の女子学生は「本番中にスタジオの中に入れたことに驚いた。CM中には生放送ということをおぼれるくらいに出演者が談話を楽しみ和んでいたもので、私には衝撃的な光景だった」と語った。

テレビ画面で見る風景と現場の違いにも驚いたようだ。「実際の現場は思っていたより暗く、想像以上に静かだと思った。テレビで見る時はタレントさん達の声などはもちろん、様々な音楽などもあるが、スタジオ自体はかなり静かで、音楽などは別に付け加えられて放送されているのだと分かった」と話す男子学生がいた。

続いて始まった「朝だ！生です旅サラダ」のスタジオにも入れていただいた。中では息を詰めて見つめていた学生たちが、スタジオを出るなり、ゲストの賀来千香子さんや知花くららさんのことを「きれいだった！顔が小さい！」と声を潜めながらも大騒ぎだった。数々の番組の大道具を置く倉庫を通り抜ける時も、見覚えのある柱や壁のパーツを見つけては興奮がさめやらなかった。

さらに、ラジオのスタジオにも入れていただき、マイクの前に座ってみる学生たちもいた。「ラジオ離れしてきている私たち世代にとってはラジオのことを知るいい機会になった」という声が学生の間から出た。

木戸さんは単に社内を見せてくれただけではない。テレビ局の仕組みやスポンサーとの関係、数秒の差が大きな影響をもたらしたミスなど実に幅広く話してくれたのだ。ある男子学生は「今までは単純にテレビは暇な時におもしろいから見るようになった。テレビの見方が変わると世の中の見方も変わるように感じる」と語った。「仕事は休みたくない」と語る木戸さんの話を聴いた女子学生は「それだけ誇りを持って仕事をされているんだと思い、私も将来そんな風に働きたいと思えた」のだそうだ。

この日参加したのは、「超氷河期」とも呼ばれる就職活動を始めた3年生が大半だった。単にテレビ局を見たというだけでない、何か生かせるものを得ただろうか。



## 2—5 映画『ザ・コーヴ』を鑑賞し、フリーランスジャーナリスト・吉富有治さんの講義「取材方法のあり方について」を聴く

映画「ザ・コーヴ」は、和歌山県太地町で行われているイルカ漁について批判的に描いた、ルイ・シホヨス監督のドキュメンタリーである。日本国内ではその上映を行うかどうかをめぐる騒動が起きたことでも話題になった。

フリーランスジャーナリストの吉富有治さんが「取材方法のあり方について」と題して講義するにあたって、学生に鑑賞しておいて欲しいと要望したのが、この映画だった。ただし、イルカやクジラの漁の賛否は問わないとのことだった。むしろ、この映画を撮影するにあたって、イルカ漁の様子を隠し撮りによって撮影したという点について考えて欲しい、ということだったのである。

吉富さん自身、一時期は週刊誌「フライデー」に記事を書いたことがあり、隠し撮りを行うカメラマンと同行する取材も何度もあったそうだ。

吉富さんは講義冒頭、学生たちに「盗撮は許されると思いますか」という疑問を投げかけた。その問いに対して、最初のごく数人が「許される」に手をあげる一方で、ほとんどが「許されない」と答えた。しかし、「ザ・コーヴ」について語り合い、吉富さんが経験した取材のお話を聴くうちに、ほとんどの学生が「許される盗撮と、許されない盗撮がある」という考えに傾いていったのだ。

ある男子学生は、「吉富さんの講義を聴いて、隠し撮り取材のあり方についての考え方が変わった。隠し撮りと聴くとどうしても犯罪の印象があり悪い印象を受けなかった。個人のプライバシーを侵害することや、犯罪に使われることもある。しかし、盗撮といってもそれでは絶対に明らかにされない真実があるということがわかった。もしかすると、盗撮で事実を明らかにしないかぎり、誰かが不正をして一方的に利益を得ているのかもしれない。盗撮といってもすべてがすべて良いものではない。しかし、他方では大企業や政府の不正を暴くことがある。私は、命を懸けて取材をしたそれらの映像価値はとても大きいということを吉富さんの講義を聴いて思った」という感想を書いた。

ただ、「ザ・コーヴ」の隠し撮りをどう評価すべきかという点については、学生たちにも迷いが残ったようだ。実際に、この問いを尋ねた吉富さんですら、「答えが分からない」とおっしゃっていたのである。

ある女子学生は「私も含め太地町について無知だった人々に、こんな現実があるのだという事実を伝えることが出来たのはそれだけでとても価値があったのではないか。その真実を知って何か良い解決策を考えつく人もいるかもしれない。少しでも良い方向へと向かっていくかもしれないのだから。せめてこれぐらいの希望は持っていてもいいのではないか。だから、『ザ・コーヴ』もその描き方にはやや問題もあったかもしれないが、盗撮をしてあの映画を作成してくれたことに私は感謝したいと思うようになった」と述べた。

また、別の女子学生は、『ザ・コーヴ』については判断が難しい。何の許可もなく撮影して映画になるのはいけないことであるし、撮影の許可を申請したところで実際に許可してくれないだろう。だから盗撮をしてまでも起こっている事実を知ってもらいたいという思いも感じ取ることができるし…。この講義が終わってから、そのもやもやは晴れなかった」という感想をもらした。

一方、ある男子学生は「取材相手によっては、真実を隠すために取材を受けてくれないこともあるだろうし、正面からいっても真実に辿りつけない場合は、そういう手段になってしまうことも仕方がない。でも、だからといって『ザ・コーヴ』の盗撮、取材の仕方がいいのかというと、それもどうなのだろうと考えてしまう。あのドキュメンタリーは一方的に描き過ぎていて、見ていて少しおかしいんじゃないかな？という部分があつた。やはり、真実を伝えるために、さまざまな方向から取材をするべきだ」と話した。

また、映画鑑賞や講義から時間が経って気持ちが変わった学生もいたようで、「作品を見終えた時は、捕鯨は残酷なことなのではないかという方に気持ちが偏っていた。だが、後になって考えると、映像に気持ちを流されてはいけない、メディアに操られてはいけないと思った。『ザ・コーヴ』の編集の仕方は、捕鯨は悪であると洗脳するような手法で編集されている。自分をしっかり持っていないとすぐに流されてしまうと思った」とのコメントを寄せた。

また、「フライデー」に対して「でっちあげの記事といやらしい写真で構成されたくない雑誌というイメージしかなかった」というある男子学生は、その雑誌に記事を書いていた吉富さんの「イルカは頭がいいから殺しちゃダメって、これって逆に言うと、頭が悪い奴は殺してもいいと言ってるようなもの」という言葉に納

得し、深く印象に残ったようだ。

## 2—6 フリーランスジャーナリスト・西谷文和さんの講義「最新映像で見るアフガン&イラク戦争」を聴く

フリーランスジャーナリストの西谷文和さんはイラクやアフガニスタンで取材をする一方、「イラクの子どもを救う会」の代表も務める。元々は市役所に勤務しつつジャーナリズムの世界との二足のわらじを履いていたが、今は紛争地の取材や、撮影した写真を各地で紹介して平和の大切さを訴える活動に専念している。

2010年は1月、6月、10月と3回にわたりアフガニスタンを取材し、12月には落語家の笑福亭鶴笑さんを団長とする「国境なき芸能団」とイラクの避難民キャンプで寄席を開いた。

西谷さんの講義に先立ち、学生たちに彼の著書「オバマの戦争」（せせらぎ出版）やDVD「G o b a k u アメリカは誰と戦っているのか」（イラクの子どもを救う会）を見せた。講義は、最新映像とお話を織り交ぜて進んだ。

講義直後、学生たちからあがった声を紹介しておく。「劣化ウラン弾の被害を受けた母親から生まれた子どもの被害が、想像以上にひどかったことに衝撃を受けた」「西谷さんのようなフリージャーナリストからしか聴けないことがまだまだ沢山あるのではないか」「自分の無知を恥じた」「西谷さんの映像は本当に衝撃的で、涙をこらえるのが必死だった」「無知が戦争を助長していくのだと思った。だから、せめてこれからはしっかりと知りたい」「9・11事件が起きたのはまだ小学生の時で、目に見たものをそのまま理解していたので、アメリカを疑うなどという概念は全くなく、100%イラクは悪者だと思い込んでいた。しかし今回の講義は私の考えを大きく覆すものだった」「目から鱗が落ちるといふか。話を聴いていて驚きの連続だった」「誰かのためになにかひとつ必死になれることを持っていることはカッコいいと思った。私もそんな将来を送りたい」

学生たちが知らなかった知識を得られたこの講義は非常に意義深い。さまざまな現場に自ら足を運んだ西谷さんの話を聴き、そこで本人が撮影してきた映像を目にする。新聞やテレビで目にする情報とは内容が違うだけでなく、学生たちが感じる衝撃の大きさも違っていったようだ。

大手の既存メディアではごくたまにしか報じられないことが、西谷さんのようなフリーランスの立場ならば報じられる自由度がより高い。ある女子学生は「アメリカの軍産複合体には前から興味があったので、そこを分かりやすく教えてもらえてよかった。テレビや新聞ではなかなかそういう裏事情は報道されず、いかにもテロが発端で起こった戦争のように言われているが、結局はテロ以前からアメリカが関与していて、本当にとんでもない国だと思った」という感想をもらした。

ただ、大手メディアだけを責めるのではちががあかない。ドキュメンタリーなどを見ようとしめない学生たちが増えていることも問題だ。よく探せばこういったニュースがまったく出ていないわけではないのだから、見る側の意識を研ぐことも大切なだろう。

戦争の本当の恐ろしさを学生に教えてくれた西谷さんは、その後またすぐアフガニスタンに行き、最近ではリビアでも取材を行っている。

## 2-7 担当教員（筆者）をインタビューして記事を書く

この「Practice in Journalism」では、ジャーナリストの発する情報に触れるだけでなく、学生たちがジャーナリストとして記事を書く訓練も行った。その一環として、担当教員である筆者をインタビューさせ、記事を書かせた。

まず、筆者が以前にある広告のためにインタビューを受けて書かれた記事のコピーを配布した。そこに書かれた情報と、これまでに筆者から聴いていた話を総合して、1週間後の講義までに質問項目をそれぞれが考えてくる、という課題を出した。

学生たちは通常、質問を尋ねることを苦手としている。そのため、インタビュー時間を90分用意すると余るのではないかと考えていた。しかし、予想に反し、インタビュー相手である筆者を時に深く考え込ませるような質問もまじえながら、時間をほぼ使い切るほど質問が続いた。事前に資料を読ませておいたことや、質問を考える時間を長く与えたこと、そして「各人が最低1問は尋ねる」という制約を課したことも功を奏したのかも知れない。

インタビューを終えて1週間ほどかけて、600字以内の記事を書くという課題を出した。

## 2—8 毎日新聞記者・遠藤孝康さんの記事を読み、講義「アフリカで見たもの」を聴き、記事を書く

毎日新聞社大阪本社の編集局社会部で記者をしていた遠藤孝康さん（本稿執筆時点では福岡に異動）は、2010年6月から7月にかけて1カ月半ほど、エチオピアとケニアで主に難民の取材を行った。その経験を「アフリカで見たもの」と題する講義で語っていただいた。

講義に先立って、遠藤さんが毎日新聞に掲載したアフリカ取材関連の記事やエッセイを読むことを課題として出しておいた。そして、当日のお話の後に各自が必ず質問をすることも、もうひとつの課題として与えた。

両国で撮影された写真を見せながら語った遠藤さんの講義に対しては、「こんな世界があるのか、自分たちとは違いすぎる、というのが最初の感想だった。ただ、日本の子どもより発展途上国の子どものほうが笑顔が素敵だ。私たちは発展途上国の方に目をやりがちだが、日本の子どもが心に持っているものを考える必要もある」といった声が出た。

また、「遠藤さんは自ら希望して取材に行ったそうだが、まずそのことに驚いた。私からすると、環境のあまりよくないところへ自ら進んでいきたいと思わないというのが普通の感情だったからだ。しかし、遠藤さんは、そんなことよりも、違う世界を見てみたい、将来の自分のためと言っていて、考えさせられた。私もこれからはどんなことでも、たとえそれが逆境でも、自分の思いのまま挑戦してみようと思った」と語った学生がいた。

また、遠藤さんの講義に基づく記事を学生が執筆することに関しては、「インタビューする相手の記事を読み、実際に話を聴いて、いい話、いい答えを導くためにインタビューをする。そうやって、自分らしいオリジナルの記事を書き上げるという経験や機会はありません。『どう書けば、その人をよりよく分かってもらえるか』『どうすればこの記事の人々の目にとまらせることができるか』などを考えながら記事を書くのは難しいことだと思った」という声があがった。

## 2-9 フジテレビのドキュメンタリー「私たちの時代」を鑑賞する

2010年末にフジテレビ系で放映されたドキュメンタリー「私たちの時代」を鑑賞した。このドキュメンタリーは、フジテレビのプロデューサーで近畿大学総合社会学部の客員教授に就任した横山隆晴さんと、石川テレビの今村亮ディレクターが制作した。

内容は、ソフトボール元全日本代表の室谷妙子先生率いる石川県立門前高校ソフトボール部の日常を描いたもの。2007年に震度6強の能登半島地震が門前町を直撃したニュースを遠征中の選手たちが見る場面も、地震後に選手の自宅を取り壊す場面も、無理に盛り上げず淡々と描く。昨今多用されるセリフの字幕もない。ナレーションはソフト部のマネージャーだった小西共佳さんが淡々と読む。このように番組は静かに進むが、過疎化が進む町で他校との統合が検討される高校に通う生徒の姿が、力強く心に迫ってくる。

そのドキュメンタリーも最近は不人気だ。理由は簡単で広告料に直結する視聴率が低いからであり、ゴールデンタイムに放送することなど稀だ。「桜の花の咲く頃に」をはじめ数々の受賞を誇るドキュメンタリーの名手、横山さんの作品も例外ではない。これまでならゴールデンタイムに放送していた彼の作品も、「私たちの時代」の放送は平日正午という時間帯。それでも視聴者が少しでも自宅にいる12月30日を選んだのは、局側のわずかな良心だろうか。

さて、講義で「私たちの時代」を鑑賞した。時間が限られたため前半のみである。ある女子学生はたまたま放映時にこの番組を見かけたが「なんとなくおもしろくなさそうだと思います、すぐにチャンネルを変えた」と語っていたが、講義で鑑賞し「こんな話だったのだとわかり、いろいろと考えさせられた。私は阪神淡路大震災を経験していて、女子高生たちの思いが痛いほど伝わってきた」と感想を述べている。こうした反応を聴くと、ドキュメンタリーそのものが不人気というより、見る機会が減った結果、興味を持たないという悪循環が起きていると感じる。

ドキュメンタリーをたまに見るという別の女子学生は「なぜか悲惨な内容や同情を求める内容が多くないだろうか。もっと成功した人の話などを見たい」と語った。「私たちの時代」のように、地震の悲惨さをことさら強調せず描けるのに、昨今は悲しさや苦しさをあおるものがある。これもドキュメンタリーの魅力をそぐひ

とつの要因ではないか。

また別の女子学生は「ドキュメンタリー撮影中に地震が起きたという偶然がすごいと思った。あまりにもカメラの撮影が自然だったので、『本当に前から撮影していたの？本当にその現場に行って撮っているの？』という不思議な気持ちでいっぱいになった」と首を傾げていた。言い方は悪いが、あまりに出来すぎているのである。

その疑問を胸に横山プロデューサーに「門前高校を取材しようと思ったきっかけは何だったのか」とメールで尋ねてみると、こんな答えが戻ってきた。「前作の最終編集作業中に石川テレビから相談があり、『こんな高校が能登にあるのですが、番組になるでしょうか？』『なりますよ』と私。どこであっても番組になると思っているので。前作放送直後に現地入り。取材撮影スタート。そうしたら後日、能登半島地震…と展開していったという状況です」という返事だ。「結局、制作者の眼差しがすべてであって、その眼差しが明瞭なものであれば、その眼差しを通底させて、どんな森羅万象も描くことができるというのが、私が心がけている、少し固く言えば制作哲学です」ともあった。

並のディレクターなら、撮影中に大地震が起こればこれはチャンスと番組を盛り上げる構成にするだろうが、横山さんにすれば大地震もドキュメンタリーのひとつの要素でしかない。仮に地震が起きなくても番組の力強さは変わらないのだ。

ある男子学生は「私たちの世代は不景気な世の中しか知らず、就職難で、問題は多いが、それでも世の中は動いていくし、私たちは懸命に強く生きていかなければならないのだと、この番組を見て感じた」という感想を残した。

優れたドキュメンタリーは見る人に大きな影響を与える。時に社会を変え、人の人生観を変える力も持つ。そのドキュメンタリーが特に民放で、テレビ局の営業上の理由で少なくなり、横山さんのような制作者も減っている。ますますバラエティー番組が栄える日本のテレビ界。笑い声とは裏腹に、日本の社会は確実に寒々とした状況になりつつある。

### (3) 講義への学生の反応

「Practice in Journalism」について、各ゲストの講義の後に感想や記事を提出させただけでなく、学期末にも講義全体に関する感想を尋ねた。そういった感想は、

前項の各講義の中に盛り込んである。

一方で、この講義に関して修正すべきではないかと感じた点についても、学生の意見を求めたところ、以下のような提案が出た。

「『話を聴く→質疑応答』のような形よりも、ゲストを含めてクラスみんなの意見が出しあえるディスカッションのような場があれば、お互いにいい刺激になる」

「先生へのインタビューではなく、学生である友達をインタビューし記事を書くようにする。先生という、普段授業を受けているけれどやはり遠いというイメージの人でなく、性格も環境も知っている人をあらためてインタビューしてみたい。そこで初めて発見することがあると楽しい」

「グループワークをもう少し入れる。ゲストの話は勉強になったが、学生同士でいろいろなことを考えたい」

「この講義では新聞に触れる機会が多くあった。新聞社見学を加えると、新聞への興味ももっと湧く。また、グループプレゼンテーションを新聞社に持って行けなだろうか。新聞社に乗り込むとなれば、学生ももっと緊張感を持ち、やる気が出る」

「講義をしてくれそうな人のリストを作り、学生に、その中で誰の話を知りたいかアンケートを取る。希望がより多かった人を呼ぶ」

「多くのゲストを呼んで、その人たちについての記事を学生への課題とする。多くの記事を書くことで、文字でその人について表現する難しさや、どこに焦点を絞って書くべきかを学べる」

「ゲストの体験談を聴くのが興味深かったので、もう1回増やしたい」

「新聞を10種類見て意見を書くのは、体力的につらかった。新聞を読む習慣があまりないというのもあり、短時間でいい点と悪い点を探し出すのは困難。各グループに1種ずつ新聞を渡し、講義の中でいい点と悪い点を探させ、次の講義でそれをプレゼンテーションさせる。それを生かして新聞記者の前であらためて発表というのを提案したい」

「この授業では、記事を書くという他の授業ではやらないことができた。吉富さんや西谷さんの回も、感想だけでなく記事も書くことにして、もっと記事を書くことに重点を置いてもいい」



『『大学生がもっと読む新聞に変えたい！私たちの提案』のプレゼンテーション以来、少し新聞に関心を持った。プレゼンテーションではなくても、なぜあまり新聞を読まないのかということを考えてみてはどうか』

「教室の外に出て取材する」

「最初にいまだどんな問題に興味があるかを学生に聴き、その中で今後どのようなことに取り組むかを決め、その問題の専門家や記者に話を聴いて、考える。学生自身が興味を持っていることだから、より興味深く取り組める」

「グループプレゼンテーションを増やす。たとえば、グループで一面ずつ新聞を作ったり、被災者やアフリカの難民にどのようなことができるかをグループで話し合い、発表する。それを他のグループに採点させ、意見交換をする」

「朝日放送を見学したが、このような機会を増やす。実際に現場に行くと多くのことを学べる」

「日本の政治を取材している記者を呼ぶ。学生の中には政治に興味を持つ者もいるはずだ。政治に関する情報は、活字ばかりでとっつきにくい新聞や、どこか遠いところの話のようなテレビのニュースからしか入らない。第一線で情報を見聞きしている人物の生の声を聴くと、政治に対する学生の興味もよりいっそう増す。講義を聴いて、自ら記事を書く」

貴重な提言なのであえてできるだけ多く掲載した。今後の「Practice in Journalism」ではこういった提言に基づき、実施可能なものについてはできるだけ修正していきたい。

#### (4) 最後に

ジャーナリズムに関わる者の仕事は、内外の動きを人々に伝えるという意味で欠くことができない。また権力の監視という使命も負っている。情報通信技術が発達したいま、誰でも情報発信はできる。しかし、物事の表面だけでなく深く掘り下げて裏側までもえぐり出す作業は、プロでなければできない部分がある。

ジャーナリストの仕事は、少しずつ形を変えつつも、次の世代へ伝えなければならぬ。より多くの大学生たちに、仕事の選択肢のひとつにジャーナリストを選んで欲しいと願いつつ、筆者は日々彼らに接している。

だが、ジャーナリスト人気の衰えは、学生との触れ合いを通じ感じている変化のひとつだ。筆者が接した学生たちがたまたまそんな集団なのかも知れない。マスメディア界の先輩があまり多くない近畿大学に見られる気質かも知れない。関西だけの風潮かも知れないし、日本の若者だけに強い傾向かも知れない。さまざまな「かも知れない」がある。しかし、仮に小さな集団のみに共通する傾向でも、放っておけない。筆者が大学に転じた最大の理由は、「自分の経験を伝えジャーナリストを育てたい」ということなのだ。「なりたくない」学生ばかりでは、それが不可能になる。

ジャーナリスト志望の学生が少ないのは、単に筆者の仕事に影響を及ぼすという小さい問題では済まない。内外から届くニュースがごく限られたものになってしまうのだ。ツイッターやYouTubeで誰でも発信できる時代なのだからプロのジャーナリストは不要という考えもあるだろうが、この仕事の存続はそれほど簡単な問題ではない。

「Practice in Journalism」では、ジャーナリストが発信する情報にできるだけ多く触れ、ジャーナリズムの各分野で働く現役の人たちの話を聴いた。また、学生自身が「ジャーナリスト」となって取材を行い記事を書く作業も行った。学生たちの感想などや授業時の反応を見ると、今後に向けた注文はあるものの、概ね好意的であり、多くを学んだ様子がうかがえる。現場で働く人々の生の声に触れること、自分自身がジャーナリストとしての疑似体験をしたことが、ジャーナリズムに対する理解や関心を深める結果につながったようだ。これは、各ゲストの協力がなくては不可能だった。ここに、謝意を表したい。

今後の講義の運営にあたっては、より多くのジャーナリズム関係者の協力を、「ゲストとして講義を行う」「講義の方法に関して提言をする」という形で得る一方で、学生たちの声も可能な限り取り入れつつ、進めていくつもりだ。学生たちがジャーナリズムに対する知識や関心を高め、さらには、一部の学生にとっては、ジャーナリストという職業に対する魅力を感じる段階に至るまでの助けを得られる存在となるよう、「Practice in Journalism」の修正を重ねていく考えである。